World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第34回

アジア　都市間の格差

須賀（すが）　努（つとむ）
コラムニスト・アジアンウオッチャー

最近タイのチェンマイとミャンマーのマンダレーを久しぶりに訪れた。バンコックやヤンゴンが日に日に発展しているのを見ているので、その国の第二の都市もそれなりに発展しているのだろうと勝手に思っていた。だが、その想像とは異なり、その発展スピードはかなり緩やかだった。各都市の状況を見ながら、アジアの都市間格差を考えてみたい。

中国人の街と言われるマンダレーだが

ミャンマーのヤンゴンからマンダレーまではいつの間にか高速道路ができていた。以前なら国道一号線を延々と行かなければならなかったが、今ではほぼ真っすぐの平坦な道をただひたすら前に進めば着いてしまう。ヤンゴン市内の渋滞を加味しても約600kmを８時間ほどで行けるようになっている。

だが車は殆ど走っていない。トラックなどは引き続き国道を使用しなければならないという事情はあるにせよ（一説にはあまりの突貫工事で高速道路を作ったため、地盤に問題があり、特に旧来から架かっている橋は危険だと言われている）、車を見かけるのが稀であったのには驚いた。勿論最近は空路がどんどん整備され、飛行機の方が車より便利だという事情もあるようだが、国内線の航空運賃はそれなりに高いので、この高速道路に利用価値はありそうなのだが。因みにミャンマーにも格安航空会社が出来ており、競争が始まっている。

写真１　マンダレー市内の様子

マンダレーの街に入ると、相変わらず高い建物はあまりなく、街が多少きれいになった、規模が広がった、とは感じられるが、急速に発展しているとは思えなかった。特に10年前には中国から中国人が大挙して押し寄せ、不動産を買い漁り、『中国人の街』と呼ばれ始めたのを覚えている。中国人が不動産を買い、しかしその開発をしない、建設をしない、ということであれば、そのビジネスはそれほど儲からないとの判断からだろう。この街にはこれといった産業もなく、動きも少ないということだろうか。ミャンマーはヤンゴンへの一極集中が進み、物資はタイや中国国境からヤンゴンへと直接運ばれてしまう。マンダレーの出る幕はあまりないということかもしれない。

なお、ヤンゴンとマンダレーの間に、新首都として人工的に作られたネピドーという都市がある。今回ヤンゴンへの帰りに寄ってみたが、広大な敷地に１区画ずつの各官庁があり、会議も出来るような大きなホテルがいくつも作られてはいたが、昼間でも街に人影はなく、まるでゴーストタウンのような印象を受けた。

ネピドーは軍事政権時代に極秘裏に首都移転計画が進められ、一夜城のように突然出現した街。政治都市としても不便なだけで、政治も経済も基本的には最大都市のヤンゴンで動いていると聞く。

ちなみに、筆者が訪れた翌週に ASEAN の会議

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

が開催され、安倍首相やオバマ大統領など世界の要人を迎える準備が続いており、街に入る検問が厳しくなっていた。本当に会議を行うだけの都市、という印象を強く持った。

ヤンゴンの不動産価格の一部は東京を越えている、と言われているが、地方都市に行けばアジアの90年代頃の様相が見られる。我々はどうしても日本を中心にアジアを見てしまうが、実際のアジアは過去の日本とは違う動きをしていることも多く、注意が必要だ。

中国人観光客が多いチェンマイ

タイのバンコックからチェンマイまでも、ちょうどヤンゴンからマンダレーと同様に北へ車で６～７時間の距離がある。こちらは国道一号線を北上するのだが、バンコック市内を過ぎると、極端に車の数が減り、それから各都市を通過する際に、渋滞が起こる状態になっていた。

そしてチェンマイの街に入ると、何とも緩い雰囲気が流れ、ターペー門など城壁の名残が一層その緩さを強調しているように見える。高い建物もなく、ショッピングモールも見当たらず、こちらもアジアの発展する都市の印象は殆どない。日本人がタイでバンコックの次に思い浮かべる都市だと思われるが、実際には東北部のウドンタニの方が人口は多いとも言われている。

外国人観光客がリラックスした服装で街歩きを楽しむような観光都市である。その中で最近目を惹くのは中国人観光客の多さ。あちこちで中国語が飛び交っている。中国人も買い物や食事だけを目当てにした観光旅行ではなく、ゆったりとした旅を楽しむムードが出てきたのだろうか。だが相変わらずマナーの悪い中国人もいるようで、中国でヒットした映画のロケ地のあるチェンマイ大学では『観光客の自由な出入りを禁止』にした。

写真２　観光客で賑わうチェンマイのナイトマーケット

チェンマイの周辺には紡績業などの伝統産業はあるものの、主要産業はやはり観光業。ここもヤンゴン同様、首都バンコックへの集中が顕著であり、チェンマイからバンコックに運ばれていく荷も少なく、道は空いている訳だ。物資はむしろ東北タイから運ばれてくる。

アジアの他の都市を見ても、基本的には首都や最大都市への一極集中であり、地理的、歴史的に異なる要素のあるベトナムのハノイとホーチミンの関係を除いては、１都市がその国を代表しており、マスコミもその１都市のみを捉えて、発展を紹介する傾向にある。だが、その国の全体像は１都市だけでは見えてこない。

特に今回取り上げたミャンマーにおいては、ヤンゴンだけを見て『発展をうんぬん』することはできないことが良く分かる。日本でも東京の一極集中が指摘されているが、アジアの都市間格差は日本の比ではないことを頭に入れて、2015年の ASEAN 統合を見据えたビジネスプランを練る方が良いのではないだろうか。